

若者における「社会的孤立」の偏位

——ネットワーク分析の調査視点から——

古賀正義

1. 社会関係資本の欠落——中退者事例研究の示唆

若者の生きづらさが問われて久しい。一言でいえば、社会のなかに自分の居場所が見つからず、将来への展望が描けない疎外された状態をさす。その原因は多様であり、対人関係のなかで精神的に生きづらい人もいれば、生活苦から経済的に生きづらい人もいる。引きこもりや不登校などにみられるように、周囲からは動機がわかりにくく、ポスト青年期が延長するなかで、30代40代と、生きることに長く苦痛を感じ続ける場合が多い。そうでありながら、周囲からはコミュニケーション障害や耐性力（レジリエンス）不足など、本人自身の資質や人格の問題性が指摘されやすい。

リストカット体験のある作家の雨宮（2008）は、次のように述べる。「自分病みみたいな状態がすごく長く続いて、自分の存在意義を得られなくては生きていけない、生きている意味がないとずっと思ってきました。」

生きづらさの感覚は、対人関係の回路を見失い、有用性のない自分との対話を際限なく繰り返す過程で生じる。本人がきまじめに生きようとすればするほど、真剣に考えれば考えるほど、深刻に増幅していく感覚なのである。

本来若者は、家庭だけでなく学校や職場、地域のサークルなど多様な場での社会関係によって生きられる自己のアイデンティティを構成してき

た。しかしながら、高校中退者を調査した結果をみると(古賀 2015, 2016), 家庭の協力が乏しく、学校で助け合う関係や居場所もなく、相談できる人が周りにいなかったという理由があげられやすい。非行行為などによって学校のルールや規範から逸脱したのではなく、むしろ通学するための規則正しい生活慣習を支えきれず、仲間との関わりの接点を失ったとする訴えが頻出していた。

若者の就学への社会環境の影響を研究した社会学者コールマン(原著 1988)は、「社会関係資本」という概念を使って、この問題に答えていた。学校での勉学を支える資源には、文化資本や経済資本のように、家庭の教育力や経済力によって学習の財や動機付けなどが向上するものがある。しかしながら、仮に家庭的条件が類似していても、中退が低率となる高校とそうでない高校が地域によって存在するという。

低率の高校を調査してみると、そこには地域の保護者相互に密接したつながりがあり(「閉鎖系」と称される)、退学を嫌い回避しようとする言動や行動が地域の保護者たちに日常的に共有されていた。つまり、交わされる高校の効用に関する情報に「期待」が込められ、それに見合った「返礼」的適応的な行動をしようという相互の信頼関係がみとめられた。こうして学校情報の人を介した「結節点」(チャンネル)が構築され、個々人の私利私欲を越える「公共の規範的感觉」が多くの保護者から生徒たちへと伝達されていた。保護者ネットワークが中退を予防する資源となったというのである。

「社会関係資本」の存在は、社会学者グラノヴェッターの離転職における若者を取り巻く「弱い紐帯」の影響が有名であるが、他にも、職業社会学者パートの論じた労働の場で有利な地位を得る者の対人関係の特徴を説明した「構造的隙間」(誰かと偏った深いかわりがない者ほど地位獲得に有利)の議論などからよく知られる。

他者との何らかの社会関係があることによって、現場の文脈に適合しそこでの利益を手にする度合いが変わってくるという見方である。俗に言えば、他者からのコネや引き、あるいは人気やウケがあることなどによって成功のチャンスが偶発的に向上するという見方である。

社会学者ブルデューが指摘するように、「知り合い承認している者同士の、制度化された持続的関係のネットワークを所有することによる、個人や集団に蓄積される現実的仮想的資源の総和」と社会関係資本を定義しておくことができる。ジンメル形式社会学にも似て、個々人の獲得する能力を超えた、他者との関係の力学が、若者の行動特性や将来生活を任意に変えていくという見方である。これまでにない関係を基盤とした新たな資本の価値と獲得の戦略を示唆する点で、非常に重要である（野沢 2006）¹⁾。

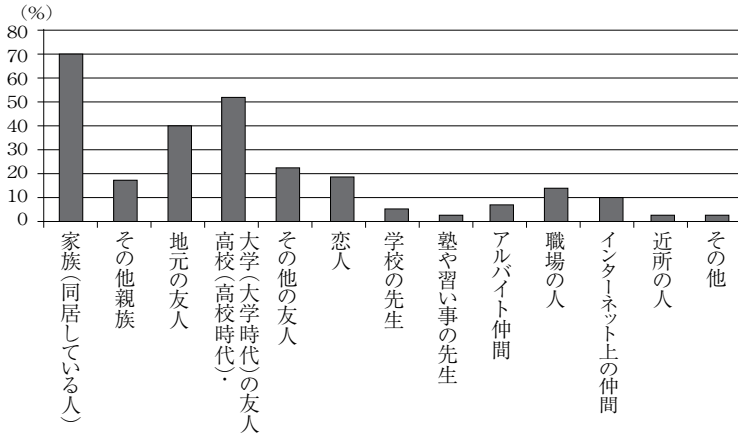
2. 若者調査からみる社会関係の偏位

そこで、筆者が調査の主要メンバーであった内閣府による『子供・若者の意識に関する調査（平成 28 年度）』（有効回答数 6,000 サンプル。標本は全国 7 ブロックに分け、ブロックごとの 15 歳から 29 歳までの人口比率を割り付けて、インターネット調査で実施。有効回答率 62.3%。）のデータを使って、社会関係資本の視点から、若者のつながりの実態を分析してみよう。

若者たちの幅広い持続的な他者との関係性はいかにして生まれ、どのような者に顕著といえるのだろうか。いいかえれば、他者とどのような手段であれコミュニケーションをよくとり、より周囲の社会や集団に参加していく若者層の特徴とは何なのか。このデータからみえる範囲で論じてみたい。

普段の生活でどのような人と、会話であれメールなどであれ、よくやりとりがあるか、「接触相手」の項目を尋ねてみた（図表 1）。

図表 1 接触相手の現状（複数回答）



一見してわかる通り、「家族（同居している人）」が7割弱、次いで、「高校・大学（時代）の友人」が5割強、さらに「地元（地域）の友人」が4割弱となっている。回答者の年齢層が16歳から29歳と就学時期を含めて幅広いためか、「恋人」や「職場の人」、「アルバイト仲間」、「インターネット上の仲間」の回答もあるが、いずれも20%を下回っている。

ただし、これまでアルバイトや仕事をした経験がないため、「アルバイト仲間」や「職場の人」に回答しなかった者が全体の3割弱いることには注意しておこう。

若者には、とりわけ同居する家族や学校を介した友人、地域の地元の友だちという3つの種類の他者との接触が多くなっている。ちなみに、どれか1種類の他者だけを選択する人は、全体の29.3%を占め、家族のみが大半である。次いで2種類の他者を選択する人は全体の23.5%、3種類以上の他者を選択する人（その半数は3種類のみである）は47.2%とほぼ半数となる。地元の友だちも他の回答との関連からみて、中学時代に形成されているらしく、概して学校生活を起点とした友人関係の広がり接触相手

に強い影響を与えていると推察される結果であった。

これら関係の強い他者の存在は、個々人のライフコースにおける継続的な一定の場（実生活の場だけでなくネット世界も場となる）の共有から生成する関係とみられ、「多重性」(multiplicity) と呼ばれる重層的な人々との関わりを示している（鈴木 2008）。この調査で関係が強い3つの種別の人々を、若者にとっての「コアな他者」と呼んでおきたい。

3. 基本属性と関連する家族との関係

そこで、いかなる属性の若者にどのような「コアな他者」が認められやすく、また彼らの社会活動はどのような広がりになっているといえるのか。まず基本属性とのクロス結果からみてみよう（図表2）。（ただし、詳細は示さないが、他のクロス集計の結果も適宜参照する。）

ここでは、より広い他者関係が可能である若者層の傾向をみるため、これまでアルバイトを含め就労経験がないと回答している者を除いて分析した。実際には「コアな他者」の選択傾向には就労経験の有無は大きな影響を与えておらず、就労経験あり層となし層で比較すると、1種類の他者選

図表2 性・年齢別の接触相手

| | | N | 家族 (同居している人) | その他 親族 | 地元 の友人 | 学 (大学時代) 高校 (高校時代) の友人 | その他 の友人 | 恋人 | 学校 の先生 | 塾 や習い 事の先生 | アル バイト 仲間 | 職場 の人 | 仲間 イン ター ネッ ト上 の | 近所 の人 | その他 |
|-------|---------|------|-----------------|-----------|-----------|------------------------------------|------------|------|-----------|------------------|-----------------|----------|---------------------------------|----------|-----|
| 【性別】 | 男性 | 3063 | 64.1 | 11.1 | 37.6 | 48.8 | 19.4 | 14.8 | 4.4 | 1.6 | 5.2 | 13.6 | 10.3 | 1.4 | 1.7 |
| | 女性 | 2937 | 75.1 | 21.9 | 41.4 | 55.0 | 23.8 | 21.3 | 3.3 | 1.8 | 7.7 | 14.3 | 9.8 | 1.5 | 1.0 |
| 【年齢別】 | 15～19 歳 | 1961 | 71.4 | 11.9 | 47.6 | 69.9 | 19.7 | 14.8 | 4.9 | 2.9 | 6.0 | 2.8 | 10.4 | 0.5 | 0.8 |
| | 20～24 歳 | 1947 | 68.0 | 15.2 | 36.8 | 51.4 | 20.9 | 23.1 | 5.1 | 1.1 | 9.3 | 13.8 | 9.2 | 1.4 | 1.2 |
| | 25～29 歳 | 2092 | 69.0 | 21.6 | 34.4 | 35.2 | 23.9 | 16.2 | 1.7 | 1.2 | 4.2 | 24.5 | 10.5 | 2.3 | 2.0 |

択 29.3% ≒ 32.3%, 2 種類 の 選 択 23.5% ≒ 26.2%, 3 種 類 以 上 の 選 択 47.1% ≒ 41.5% となつてゐる。

まず、「家族（同居している人）」との強い接触を回答する人たちの特徴をみでみる。第一に、シングルファミリーなども増加するなか、父親や母親、あるいはきょうだいらと同居している割合がいずれも 7 割を上回っており、かなりの高率である。また、女性に選択する割合が高く（女性 75.1% > 男性 64.1%）、既婚者や専業主婦などでさらに割合が高い。

反面、年齢の区分による影響はほとんどない。10 代後半から 20 代後半まではほぼ同じ比率である。関連するの、家庭の暮らし向きが「よい」+「どちらかといえばよい」とする人で、「どちらかといえば悪い」+「悪い」とする人より回答率がかなり高くなる（71.7% + 72.7% > 65.3% + 57.2%）。

他方で、興味深いことに、家庭へのパラサイトの影響もあるためか、「現在は就業していないが、過去に就業経験がある」人が、「就業している」人より高い接触の割合を示す（74.7% > 66.2%）。そのため、数は少ないが現在「無業者」である人と「学生」である人とで、接触の回答割合が変わらない（71.8% ≒ 69.6%）。

さらに、インターネット等の利用との関係を見ると、家族と接触する層はネット利用も高い割合となる。「たいへんよく使う」+「かなり使う」人がそれぞれ 7 割にも上り、「あまり」+「ほとんど使わない」層との差が大きい（71.7% + 67.1% > 54.9% + 48.9%）。他の設問結果にもあるように、「自分の部屋」や「家庭」を居場所と回答する人が非常に多いが、家庭の滞留時間が長く緊密なことが室内での活動の内容（メールや SNS 利用など）にも影響している結果であろう。

4. 学校時代の友人関係との関連

では、「高校・大学（時代）の友人」を選ぶ人たちの特徴はどうか。「家族」の接触を選択する層と、場は異なりながらも、半数強の者が重なっている。

第一に、ここでは年齢層の違いが大きい。高校・大学の就学期である10代後半や20代前半では、20代後半と異なり、当然ながら直接の学校生活・友人関係の影響が大きく、コミュニケーション頻度が高い（69.9% > 51.4% > 35.2%）。女性がやや多いが、「家族（同居している人）」の選択ほどではない。

職業でいえば、「学生」が圧倒的に高く（72.2%）、「正規」「非正規」の就業は、ともに4割程度（40.2%、35.8%）で変わらない。他方で、「無業者」が極めて低くなる傾向がある（17.6%）。学生時代のネットワークへの入りにくさがあるためだろうか。学校化した生活への適合と友人関係の接触密度との強い関連をうかがわせる。

インターネット等利用をみると、やはり高い割合となる。「たいへんよく使う」+「かなり使う」人がそれぞれ5割強にも上り、「あまり」+「ほとんど使わない」層との差は大きい（53.7% + 51.0% > 37.1% + 17.0%）。学校を介した仲間・他者との接触とネットでの相互接触は一体性があるといえる結果である。

5. 地元の友だちとの関係

最後に、2つの接触相手とは異質な傾向がある「地元（地域）の友だち」を取り上げよう。ここでも、約半数に「高校・大学（時代）の友人」の選択との重なりがあるが、限定的な地域単位での就学となる中学校卒業直後の影響もあるためか、10代後半に、20代前半世代・後半世代以上の選択がみいだせる（47.6% > 36.8% ≒ 34.4%）。性差はほとんどみいだせない。

職業についてみると、多少「学生」が高いものの、「正規」「(アルバイトを含む)非正規」就業者との差はかなり小さい(44.6%≒38.4%, 36.4%)。ちなみに「無業者」は依然低い傾向がある(21.3%)。就業の有無との関係をもても同様に明確な差異はみいだせず、地元つながりの強さは、学校のような制度的な場のつながりと異なり、学校の同級生などをスタートとしながらも、個々の選択的な人間関係の継続とみられる結果であった。

インターネット等利用では、「地元の友だち」がいる者の方が「大変よく使う」「かなり使う」ともやや高い割合となるが、「高校・大学(時代の友人)」の結果と異なり、「あまり」「ほとんど使わない」人との割合の差が小さくなってしまふ(41.5% + 37.1% > 30.8% + 14.8%)。ここでも、地元の友だちとの関係維持の緩やかな特質がみいだせる。

このように3種類の「コアな他者」とのつながりには質的な差異があり、「家族」が接触相手の基本となったうえで、いくつかの学校や地元地域を媒介とした仲間関係が重ね合わされていく性質があるとみられる。

6. 交流する人の偏在と「社会的孤立」

では、「コアな他者」と数多く関わりを持っている若者とそうでない若者では、どのような生活の実感や社会参加活動の差異があるのだろうか(図表3から図表5)。

先にあげた接触相手の設問で、何種類の他者をあげたかによって、3つのグループを構成してみた(これまで何らかの就労経験がある者のみ対象)。

1種類の他者選択は、大半が「(同居)家族」だが、友人だけをあげる場合もある。2種類の選択も、「(同居)家族」と「高校・大学(時代の友人)」の組み合わせが多い。3種類以上の選択は、「地元の友だち」が加

図表3 生活の充実度

(%)

| | N | 生活が充実 | どちらかといえ ば充実 | どちらかといえ ば充実 していない | 生活が充実 していない |
|-----------|------|-------|----------------|-------------------------|----------------|
| 接触相手1種類 | 1245 | 17.6 | 37.5 | 26.3 | 18.6 |
| 接触相手2種類 | 998 | 17.5 | 48.5 | 23.4 | 10.5 |
| 接触相手3種類以上 | 2000 | 22.2 | 54.5 | 17.6 | 5.8 |

図表4 接触人数別の「居場所」

(%)

| | 自分の部屋 | | 家 庭 * | | 学 校 ** | | 職 場 *** | | 地 域 **** | | | イン ター ネ ット 空 間 | |
|-----------|------------------|--------------------------------------|------------------|--------------------------------------|------------------|--------------------------------------|------------------|--------------------------------------|------------------|--------------------------------------|------------------|--------------------------------------|--|
| | そ う 思 う | ど ち ら か と い え ば | そ う 思 う | ど ち ら か と い え ば | そ う 思 う | ど ち ら か と い え ば | そ う 思 う | ど ち ら か と い え ば | そ う 思 う | ど ち ら か と い え ば | そ う 思 う | ど ち ら か と い え ば | |
| 接触相手1種類 | 55.3 | 29.7 | 28.0 | 40.1 | 9.2 | 25.3 | 7.4 | 25.9 | 10.8 | 34.1 | 17.9 | 38.4 | |
| 接触相手2種類 | 60.7 | 28.7 | 38.7 | 42.1 | 9.3 | 31.4 | 5.2 | 28.5 | 9.5 | 46.0 | 16.5 | 43.2 | |
| 接触相手3種類以上 | 66.6 | 26.0 | 48.4 | 37.9 | 13.8 | 41.8 | 9.9 | 35.9 | 16.5 | 49.4 | 19.3 | 45.2 | |
| 全 体 | 61.0 | 28.0 | 39.1 | 40.7 | 12.2 | 37.0 | 8.1 | 31.2 | 45.3 | 25.1 | 43.4 | 25.3 | |

* 実家や親族に家を含む

** 卒業した学校を含む

*** 過去の職場を含む

**** 現在住んでいる場所やそこにある施設など

わり、すべての「コアな他者」を含むケースが多くなる。先に述べたように、半数弱がこれにあたり、思いのほかにも多重な関係性がある若者は多い。以下、「1種群」「2種群」「多種群」とそれぞれを表記しておく。

まず、生活の充実度からみてみよう。「充実している」「どちらかといえ
ば充実している」とする割合でみると、多種群が他群よりきわめて高い割合となる。具体的には、多種群が22.2% + 54.5%で約8割が「充実している」と回答しているのに比して、2種群が17.5% + 48.5%で約6割、1種群が17.6% + 37.5%で6割弱にすぎず、その差は大きい。なぜか。

「居場所」（ここでは、ほっとできる場所、居心地の良い場所などをさすと定義）と思える所を回答してもらくと、多種群は多くの場所で2種群や1種群より高い割合を示した。例えば、「自分の部屋」では、「そう思う」の割合で、それぞれ66.6% > 60.7% > 55.3%となる。比較的他者との関係性に関わらない場と思えても、他の場の居場所感覚の広がりがないと、強く居場所を感じ取ることができないようだ。

「家庭」（48.4% > 38.7% > 28.0%）の結果もまったく同様である。それ以外の場の回答でも、「どちらかといえばそう思う」の割合まで含めると、「学校」（55.6% > 40.7% > 34.5%）、「職場」（45.8% > 33.7% > 33.3%）、「地域」（65.9% > 55.5% > 44.9%）と、どこについても「コアな他者」の選択数による諸群間の差が非常に大きくなる。

7. 接触群によるコミュニケーション実態の差異

このことは、それぞれの場の生活の充実や安心があることと不可分であるだろう。家族、学校の友人、職場の人、地域の人との関係性も問うているが、ここでも接触・コミュニケーションが多いというだけでなく、「楽しく話せる時がある」や「困ったときは助けてくれる」などの親密さの項目で、多種群と他の群との差が大きい。

例えば、家庭の関わりでは、「楽しく話せる時がある」に関して「そう思う」とする者は、多種群48.6% > 2種群36.3% > 1種群21.5%と大きな開きがある。同様に、「困ったときは助けてくれる」では、多種群46.0% > 2種群35.9% > 1種群21.8%と、ここでも差が大きい。学校、職場の結果も傾向は同一である。

ただし、「地域」となるとここまでの違いはなく、「どちらかといえばそう思う」まで含めて、「楽しく話せる時がある」でも、多種群30.5% > 2種群22.0% > 1種群23.9%、と差はかなり小さくなる。いずれにしても、

家庭・学校・職場のどこもが有用な場と感じられるのは、多種のコアな接触相手を持つ層の特性であるといえる。

8. 社会参加の度合いや将来像

図表5に示すように、多種群は2種群と比較しても、特別に社会参加の経験が豊かである。

高い割合を示す上位5つの項目（ほかには、自己啓発、創作活動など5項目）に「あてはまるものはない」を加えて各群を比較しておいた。「映画、展覧会、音楽などの鑑賞」「スポーツ」「自然体験」「観光」「地域行事」のいずれでも、多種群は10%以上活動が多くなっている。反対に「あてはまるものはない」という回答が、1種群の半分以下である。多様な活動参加と接触相手の多重化は強く関連しているとみられる。

さらに、活動参加の動機も多種群ほど多元化していくとみられる（詳細データ省略）。「楽しそうな時」＝多種群70.8%＞2種群59.0%＞1種群43.38%、「自分のやりたいことを発見できそうな時」＝多種群39.1%＞2種群32.8%＞1種群18.5%、「いろいろな人との出会いが期待できる時」＝多種

図表5 接触人数別の社会参加状況・将来の自分像

(%)

| | 【社会参加の活動】 | | | | | | 【将来の自分】 | | | | |
|---------------|----------------|-------------|----------------------|------|------------|------------|------------|----------------|--------------------|-----------------|-----------------|
| | 映画、展覧会、音楽などの鑑賞 | スポーツ（観戦を含む） | 自然体験（キャンプ、遊び、天体観測など） | 観光 | 地域行事（祭りなど） | あてはまるものはない | 何でも話せる人がいる | 共通の趣味を持った仲間がいる | 自分の収入で暮らせる仕事についている | 周りの人や社会の役に立っている | なりたいたい自分に近づいている |
| 接触相手 1種類 | 32.8 | 18.5 | 9.9 | 17.1 | 4.8 | 43.7 | 17.8 | 15.0 | 13.9 | 10.2 | 10.4 |
| 接触相手 2種類 | 49.8 | 26.7 | 13.9 | 32.6 | 9.6 | 28.7 | 21.1 | 18.8 | 18.0 | 9.1 | 10.2 |
| 接触相手 3種類以上 | 62.6 | 37.4 | 23.8 | 47.7 | 21.7 | 17.7 | 33.6 | 29.5 | 23.3 | 14.9 | 17.5 |

群 34.7% > 2 種群 29.8% > 1 種群 15.8 % , 「新しい技術や能力を身につけたり経験を積んだりすることが期待できる時」 = 多種群 25.2% > 2 種群 16.8% > 1 種群 8.68% など。余暇的な参加動機から学習的なそれまですべてに多種群が積極的な評価をしていた。

最後に、再度図表 5 から、今から 10 年後に自分の生活がどうなるかを問いかけた将来展望をみておこう（「将来の自分」と表記）。ここでは、多種群の特徴が冒頭に述べた「生きづらさ」の感覚と裏返しになっていることが明瞭にわかる。「何でも話せる人がいる」、「共通の趣味を持った仲間がいる」、「なりたい自分に近づいている」といった関係性や自己像の項目では回答の割合が高い。

しかしながら、付言しておけば、「周りの人や社会の役に立っている」や「自分の収入で暮らせる仕事についている」というような有益性の問いになると回答率が低くなり、社会関係の資本による将来生活への貢献と同時に、一定の限界も感じさせる。

9. SNEP 論をこえて——関係の起点となる場（学校）の存在を問う

ここまで多くの他者とのコミュニケーションが緊密であり、さまざまな場を居場所と感じ取れる若者群の存在を指摘してきた。ここでは、一種群のように、家庭でのコミュニケーションに多くを依存し広がりがない若者層が、概して基点となる家庭についても多種群より低い評価をしていることを指摘した。多元的な関係性を持つことによる「生きやすさ」の効用を指摘することができる。

しかしながら、こうしたコアな他者関係の起点は概して家庭と学校の 2 点に限定されると指摘できる。

従来、SNEP 論に代表されるように、就労就学の機会を剥奪され孤立する若者が問題視されてきた。もちろん、排除の果てに孤独になる若者が生

じていく過程を注視しないわけにはいかない。だが、ある関係の資源を異なる関係の資源と分離して論じるわけにはいかないことに注意が必要である。例えば実際家庭だけが良い関係で学校は悪い関係とはいかない。この調査の分析も示唆するように、関係の相互依存や創発効果が常に付きまとうからだ。

孤立をなくすことは、一つの関係や絆を強固に構築することよりむしろ、さまざまな関係の可能性を感じて緩やかに生きられるようにすることにあるのではないか。「多重性」の効用はこれまで十分に評価されてはこなかったのではないか。

本調査の結果からは、若者の多くが実践するように、対人関係のなかでの多元化する自己像の支え方が必要であることが示唆された。この点で、緩やかな多くの立場の人と関わりを持つ機会を提供し支援していくことが、「社会関係資本」の存在を若者に感じ取らせ「生きやすさ」を保証する有効な方途であると思われる。

[追記]

本稿は、「偏位する「社会的孤立」—その意味と課題」(内閣府 2017『子供若者の意識に関する調査報告書』pp. 140—145)と題して寄稿した報告に、加筆修正を加えたものである。日本教育社会学会第 69 回大会でも発表を行い、会場でご意見ご議論をいただいた。あわせて、多くの関係者に謝意を表したい。

注

- 1) 本稿であげる外国研究者の紹介は、野沢(2006)によるリーディングスの翻訳文献によっている。

参考文献

- 雨宮処凛, 萱野稔人, 2008, 『生きづらさについて』, 光文社
古賀正義, 2015, 「高校中退者の排除と包摂—中退後の進路選択とその要因に関する調査から—」, 『教育社会学研究』第 96 集, 47-67 頁
古賀正義, 2016, 「高校中退者問題と格差社会」, 佐藤学ほか編『社会のなかの教育』

- (講座『教育・変革への展望』第2巻) 139-167頁
- 古賀正義, 石川良子編著, 2018, 『ひきこもりと家族の社会学』, 世界思想社
- 鈴木努, 2008, 「社会ネットワークの多層性・多重性・多様性」『社会学論考』29, 首都大学東京 1-20頁
- 内閣府, 2016, 『子供・若者の意識に関する調査(平成28年度)』(一部, 『子ども・若者白書(平成28年度版)』にも再録)
- 野沢慎司編・監訳, 2006, 『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』, 勁草書房